

源氏物語の夕顔

【夕 顔】

三位中将の娘。玉鬘の母。頭中将の体験談によれば、親と死別後、頭中将が通うようになり女子（玉鬘）をもうけたが、正妻方におどされ、娘を伴って姿を隠したという。五条の大弐の乳母を見舞った光源氏と夕顔にまつわる歌を贈答、互いに身分を隠したまま源氏が通うようになる。源氏に荒れ果てた某の院まで伴われ、自身の素性は語らないまま、物の怪に憑かれて急死。亡骸は東山に運ばれ葬られる。源氏の侍女となった右近によれば、夕顔は頭中将の正妻方におどされて西の京の乳母のもとに隠れ住んだ後、五条の家に仮住まいをしていたのだという。源氏によって四十九日の供養が行われた。法事のある夜、源氏の夢に現れる。源氏は後までその死別を残念に思い、遺児玉鬘は九州下向を経た後に源氏に養女として迎えられる。（大和書房『源氏物語辞典』による）

【あらすじ】

源氏十七歳の夏、六条御息所のもとへ通う途中、五条に住む大弐の乳母を見舞う。夕顔の花が咲く隣家の風情に興味を持った源氏が花を所望すると、その家の女童が扇に花を載せて差し出す。扇に記された歌に心引かれた源氏は乳母子の惟光にこの家の女（夕顔）の素姓を調べさせる。

夕顔は、妻である葵上の兄の頭中将と関係があるらしいと知った源氏は、惟光の手引きで互いに身分を隠したまま関わりを持つようになる。八月十五日の夜、源氏は夕顔の狭い家で一夜を明かし、夕顔を某院へと誘う。その夜、源氏は奇怪な夢を見るが、目覚めると夕顔は息絶えていた。

密かに夕顔の葬送を済ませた源氏だったが、その悲しみから重い病となる。ようやく病が癒えた源氏は、夕顔が頭中将の忍び通った女であり、三歳の娘（玉鬘）がいることを知った。

【源氏は隣家の夕顔の花を所望する】

六条わたりの御忍び歩きのころ、内裏りまかてたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しくして、上は半藪四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地する。いかなる者の集へるならむと様変りて思さる。

御車もいたくやつしたまへり。前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、門は藪のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にも申す」と独りごちたまふを、御隨身ついあて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよるぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまぬれ」とのたまへば、こ

前シテー里女
後シテー夕顔女（霊）
ワキー僧
アイー所の者

第一段 ワキの登場 雲林院の僧が立花供養を行なう

「名ノリ」 ワキ「これは都紫野雲林院に住居する僧にて候、さても我一夏の間花を立て候、はや安居も過ぎ方になり候へば、色よき花を集め、花の供養を執り行はばやと存じ候

「サシ」 ワキ「敬つて白す立花供養の事、右非情草木たりといへども、この花広林に開けたり、『あに心なしと言はんや、就中泥を出でし蓮、一乗妙典の題目たり、この結縁に引かれ、草木国土悉皆成仏道

第二段 シテの登場 里女が現れて仏に花を手向ける

「下ノ詠」 シテ『手に取れば手ぶさに穢る立てながら、三世の仏に、花たてまつる。

折りつればたぶさに穢る立てながら三世の仏に花奉る 遍昭（後撰和歌集）

第三段 ワキ・シテの応対、シテの中入 里女は五条あたりに住む者と言い残して姿を消す

「掛ケ合」 ワキ「不思議やな今までは、草木呂葉として見えつる中に、白き花のおのれひとり笑の眉を開けたるは、如何なる花を立てけるぞ シテ『愚かのお僧の仰せやな、黄昏時の折なるに、なかはそれと御覽ぜざる、さりながら名は人めきて賤しき垣ほに懸りたれば、知ろし召さぬは理なり、これは夕顔の花にて候 ワキ『げにげにさぞと夕顔の、花の主は如何なる人ぞ シテ「名のらずと終には知ろし召さるべし、我はこの花の蔭よりまありたり ワキ『さてはこの世に亡き人の、花の供養に遇はんためか、それにつけても名のり給へ シテ「名はありながら亡き跡に、なりし昔の物語、ワキ『何某の院にも シテ『常はさむらふ真には

「上歌」 地『五條辺と夕顔の、五條辺と夕顔の、空目せし間に夢となり、面影ばかり亡き跡の、立花の蔭に隠れけり、立花の蔭に隠れけり。

第四段 アイの物語 所の者が僧に『源氏物語』の夕顔の女の事を物語る

第五段 ワキの待受 僧は五条を訪れる

ワキ『ありし教へに従つて五條辺に来て見れば、げにも昔のいまし所、さながら宿りも夕顔の、瓢箪屢々空し、草顔淵が巷に滋し

瓢箪屢々空 草滋顔淵之巷 藜藿深鎖 雨湿原憲之枢 橘直幹（和漢朗詠集）

第六段 シテの登場 蔀戸を押し開けて夕顔女が姿を現す

「詠」 シテ『藜藿深く鎖せり、夕陽のさんせいあらたに、窓をうがつて去る 地『しうたんの泉の声 シテ『雨原憲が枢を湿す

「下歌」 地『さらでも袖を湿すは、廬山の雪のあけぼの。

「上歌」 地『窓東に向ふろうげつは、窓東に向かふるうげつは、琴瑟にあたり、しうしやうの秋の

山、物凄の気色や。

「ロンギ」 地『げに物凄き風の音、寶戸の竹垣ありし世の、夢の姿を見せ給へ、菩提を深く弔はんシテ』山の端の、心も知らで行く月は、上の空にて絶えし跡の、また何時か逢ふべき 地『山賤の、垣ほ荒るともをりをりは シテ』あはれをかけよ撫子の 地『花の姿をまみえなば シテ』跡弔ふべきか 地『なかなかに シテ』さらばと思ひ夕顔の 地『草の半蔀押し上げて、立ち出づる御姿、見るに涙のとどまらず。』

夕陽山影穿窓入 幽澗泉声向戸飛 嗟峨天皇（新撰朗詠集）

窓東早月当琴榻 墙上秋山入酒盃 方于（新撰朗詠集）

山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露 （源氏物語・帚木）

第七段 シテの物語 夕顔女は光源氏との恋を物語る

「クセ」 地『その頃源氏の、中将と聞えしは、この夕顔の草枕、ただ仮臥の夜もすがら、隣を聞けば三吉野や、御嶽精進の御声にて、南無当来導師、弥勒仏とぞ称へける、今も尊きお供養に、その時の思ひ出でられて、そぞろに濡るる袂かな。なほそれよりも忘れぬは、源氏この宿を、見初め給ひし夕つ方、惟光を招き寄せ、あの花折れとのたまへば、白き扇の、端いたう焦したりしに、この花を折りに参らす。シテ『源氏つくづくと御覧じて、地『うち渡す、遠方人に問ふとても、それその花と答へずは、終に知らでもあるべきに、逢ひに扇を手に触るる、契りの程の嬉しさ、折々尋ね寄るならば、定めぬ海士のこの宿の、主を誰と白波の、よるべの末を頼まんと、一首を詠じおはします。』

第八段 シテの舞事 夕顔女は光源氏の和歌を口ずさみつつ舞う

「ワカ」 地『折りてこそ。 【序ノ舞】

「ワカ」 シテ『折りてこそ、それかとも見め、たそかれに

「ノリ地」 地『ほのぼの見えし、花の夕顔、花の夕顔、花の夕顔。』

第九段 結末 夜明けとともに夕顔女は姿を消す

「ノリ地」 シテ『終の宿りは、知らせ申しつ 地『常には訪ひ シテ』おはしませと 地『木綿附の、鳥の音 シテ』鐘もしきりに 地『告げ渡る、東雲、あさまにも、なりぬべし、明けぬ前にと、夕顔の宿りの、また半蔀の、内に入りて、そのまま夢とぞ、なりにける。』